私の時代

『歌が生まれる』物語

能勢　博（S48年卒／BS）

"もちろん、いいよ！"

コンサートのリハーサル中に擦然に現れた宇崎竜童さんは、小学校の校歌を作ってほしいなどという突拍子もない頼みを、条件も聞かずに引き受けてくれたのでした。

私の末の子供が通う茨城県の南部にある「駒馬台小学校」は、よくある新旧住民の対立問題を引きずって、開校6年目になっても校歌がありませんでした。たまたま、私がPTA会長をすることになり、校歌作成運動の結果、地域の協議も作る方向で盛り上がってきました。ところが、作詞作曲を著名な人に頼まないと、また反対に遭う恐れがあったのですが、資金がありません。

学校関係者とともに

再び挫折かというムードの中、なにげに宇崎竜童さん、阿木燿子さんの名前を出したところ、役員会満場一致で正式依頼の決議がなされてしまいました。

さあ困った。相手は、先輩とはいえ超有名人。面識もなければ、市の予算も極めて少額。半分あきらめ気分で、楽友会活動でご紹介させていただいている43年卒の中村真一先輩に相談したところ、同じく43年卒の尾崎桂一郎先輩が面会の手配をしてくださり、その結果が冒頭の情景だったのです。

3カ月ほどで曲が完成し、学校でデモテープを発表することになりました。曲が流れている間の静寂と、曲が終わった瞬間の割れるような拍手は、思い出すたびに頬がゆるみます。その後、原曲を基にピアノ伴奏用の編曲を53年卒の袴塚淳君に、ブラバン用の編曲を同じく53年卒の山口龍夫君にと、ふたりのプロのミュージシャンにほとんど強引にお願いし、見事に学友会パワーによる作品が完成致しました。卒業式で初めて全校生徒による合唱が発表され、改めて地域の人たちに感動の波が広がっていったことは言うまでもありません。

制作活動中には、宇崎さん、阿木さんと赤坂「つ木通り」の果物屋さんの2階にある、おふたりが経営される「ノヴェンバー・イレブンス」というレストランで打ち合わせを行いました。おふたりともホントに芸能人…？と思うほどに気さくな人柄で助かりました。お店は、お料理がとてもおいしく、かつお値段も手頃ですのでお勧めいたします。

宇崎さん、阿木さんをはじめ、ご協力頂きました楽友会の皆様、本当にありがとうございました。

最後に、一番のみですが、素晴らしい歌詞をお楽しみください。

「歌が生まれる」

（駒馬台小学校校歌）

作詞　阿木燿子　　作曲　宇崎竜童

鳥が飛んだら
風が生まれる
広い空にも道があるんだね
花が咲くたび
歌が生まれる
そんな学びの庭が大好き
若い心　スクスク育てよと
時計台が時を刻んでいる
春　夏　秋　冬　みんなで歌おう
目と目を合わせて　元気にこの歌

「ウードに魅せられて」

常味　裕司（S59年卒／D）

それは、1枚のレコードとの出会いだった。黒いジャケットの中央に描かれたイスラム細密画に魅かれて買ったレコードが、その後の私の音楽人生を変えてしまうとは思いもよらなかった。

イラクのウード演奏家ムニール・バシール氏のタクスィーム（独奏即興）一集で、私がウードを始めるきっかけとなった一枚である。

私は軽音時代まではギターを弾いてはいたが、自己表現としての音楽を考えたときに、社会現象、そして産業として定着した感のあるロックやポップスなどの音楽と、私の目指すものとの間に大きな隔たりを感じずにはいられなかった。私は自分に正直でいられる音楽を探し求め、世界中の音楽を聴くようになった。

初めて耳にするアラブの弦楽器ウードの音色、かつて聴いたことのない深みのある弦の響き、同時に根源を揺さぶられるような懐かしい感覚は、これまでに受けた音楽教育、ラジオ、TV、レコードで日常耳にする西洋的手法で画一化された音楽の既成概念から抜け出ることの出来なかった私の狭い音楽観を見事に覆してくれた。これだと思った。

まずは楽器の入手。楽器屋に行ったところで手に入るものでもない。教則本にしろチューニングの方法、ピック、本に至るまで何の手掛かりもないことが、逆に私に力を与えてくれた。その一つを探って行く作業は、非常にエキサイティングなものだった。私は幸運にも二人のすばらしい師に巡り会えた。スピアのハムザ・エル・ディンとチュニジアのアリ・スリティ氏である。

私が彼等から強烈に感じたのは「オリジン」というものである。オリジナリティが重要視される音楽界にあって、作詞・作曲をすることだけがそのことを満たしていると言えるのだろうか。彼等はごく自然に愛すべき彼等の音楽を演奏する。売るための音楽とはあきらかに一線を画するその音楽とそこからくる充実感、幸福感は、彼等の誇り高い民族意識に裏打ちされたものなのではないだろうか。そこにこそ、私はオリジナリティというものを感じたのである。

で、私はといえば日本人。オリジン追求となれば邦楽をやればいいといわれるかも知れない。だが、ウードの響きに魅せられた私がアラブ古典音楽という未知なるものと接点をもつことで、ある種のスリルを感じながらアジア人、日本人である自分のオリジンを感じられたら聴いてくれる人にも単なる異国の音楽紹介にとどまらない音の世界に触れてもらえるのではないかとわくわくしてしまうのである。

ウード（Oud、Ud）

日本、中国の琵琶、西洋のリュート等の祖先、もしくは親戚にあたり、アラブ、トルコのみならずイラン、コーカサス、ギリシャ等アラブ影響圏で広く演奏される撥弦楽器。寄木造、洋梨型の胴から醸し出される音色は深く味わいがある。フレットは無く、複弦5～6コースを鷲の羽軸等で作られたミズラブ（リシャ）を用いて演奏する。「Oud」は枝、木片、香の意味で、英語のWoodの語源とも関係が深い。表面板には透かし彫りなど施されたサウンドホールがあり、一つは太陽、あとの二つは月を意味している。